ボランテアの話

私たちがそのオジサンと係わりを持ったのは東日本大震災が起きた半年後、平成二十三年九月の二学期が始まったばかりの放課後のことであった。久し振りに集まった放送部のメンバーが五月に行なわれたＮコン山梨県予選（ＮＨＫ放送コンクール）の反省会や他校の噂話に明け暮れていた最中、顧問のＡ先生がやって来て、学校にこんな手紙が来ているんだけど、みんなで読んでみてくれ！と一通の封書を私に渡した。私は一応、放送部の部長に任命されている。宛名は△△△△高等学校放送部様、ペン書きの達筆である。既に封は切られていて先生が目を通しているようだった。先生は来年のコンクール参加の要請と勘違いしたらしい。便箋には次のような文面が綴られていた。

前略

私は六十年前に御校で机を並べて勉学に励んだ一（いち）ＯＢです。現在は七十七歳になる後期高齢者、喜寿を迎えた老人です。先輩ズラをいいことにして今日は母校の後輩たち皆さんへ、いささかご無理なお願いをしたいと存じて筆を執りました。お願いが適うかどうかは皆さんの選択、判断ですから可否は一向に気にしていません、とりあえず気持を認（したた）めましたのでご覧下さい。・・・

実は私には物書きの道楽があってこれまでに五十作品以上のエッセイや小説を創ってきました。ところが或る事情があって、最近、どうしても自分の作品を誰かに読んでもらって聴いてみたいという強い希望が湧いてきたのです。プロの朗読家に頼むほどの金銭の余裕も無い私は、ひょんなことから母校の放送部で私の願いが適うかどうか、ひとまずお訊ねしてみようと筆を執った次第です。如何でしょうか？・・・ご返事を承りたいと思っています。・・・

草々

八月某日　　〇〇〇〇

部員が集合した放課後、私達はその手紙を廻し読みした。三年生は私ともう一人の女子、二年生は四名（女子三名、男子一名）一年生三名（女子二名、男子一名）の合計九名の放送部所帯である。うちアナウンサー専攻六名はそのままにアナウサー志望者であり残り三名が朗読専攻、将来は声優になりたいという夢と希望を持っていた。それぞれの意見を述べてもらうことにした結果は以下である。

① アナウンサー志望が多い我が校では朗読専攻が少ないから五十作品は一寸無理ではないか。
② どんな作品か不明だから何とも答えようが無い。
③ Ｎコンのような課題作品から選んで朗読するのなら、まだ分かるが個人の作品はどうか？
④ Ｎコンは二分の制限時間があり長い朗読は無理。

大体はこのような否定的な内容であった。ただ一人、二年生の女子が、先生にも意見を聞いたらいいと思います、と言う。私もそう思った。大先輩の意向を私達だけの判断で左右していい訳がない。それで翌日職員室へ行って顧問のＡ先生に部員の総意を話したところ、じゃあ、僕からみんなに提案があるので放課後、部室で待っていて！ということになった。

先生は、手紙の相手は我が校の先輩であるし、一応、返事を上げなければならないが、作品がどんなものであるか分からない、高校生が朗読するに相応しいものかどうか、更には長いものか短いものかも分からないから、とりあえず二つ三つの作品を送ってもらってから検討したい、すげなく一方的に断るのは礼儀に外れるだろうという示唆であった。先生のアドバイスには誰も異存はない。

私が代表して返事を書き送った。一週間ばかりを挟んで再びオジさんから分厚いＡ４版の封筒が届く。

それにはこんな内容の手紙が添えられ原稿用紙にペン書きした作品三つが同封されていた。

前略

早々のご返事、かたじけなく思いました。ありがとう存じます。・・・

正直言いますと、今からお話することには、やや躊躇いがありまして、それで逡巡していました。が、優秀な後輩諸君のことだから思い切ってお話しようと考え直しました。少々長話になりますがご勘弁ください。

私は東日本大震災と忌まわしい原発事故によって避難生活を余儀なくされている一人です。住んでいた福島県相馬郡飯舘村は一部地域が放射能汚染値が高く帰還困難区域になってしまいました。自宅は、たまたまそれに該当して永遠に帰れそうもありません。爆発事故直後、直ぐ帰れるものと思っていた私どもは着の身

着のままであわただしく自宅を退去したのですが二度三度と転居を余儀なくされ半年目にしてここへ落ち着くことが出来ました。津波の被害は免れ我が自宅は無事だったのですが原発爆発事故で止む無く家を明けることになったのです。一緒だった六人の我が家族はそれぞれがバラバラになりました。娘夫婦と孫二人は郡山市に転居、私と家内の老夫婦は東京都の集合住宅の２ＤＫの一室へ移動しました。私は飯舘村近くの方が良かったのですが村の住民が纏まって住む方がよろしいという行政の意向で止むを得ずマンション住まいになりました。何十家族が空き室だった教職員住宅へ移行したのです。しかし、村の絆が大切とは言うものの住宅が密接した地域と違って家と家の距離も離れていて若い世代は会合もあって地域の繋がりもあるのですが高齢者になるとたまに農協に行くくらいしか用事はありません。ですから隣人とも滅多に交流は無いのでした。都会のマンション生活はただ味気ない日々に尽きます。狭い団地生活とエレベーターの乗り降りは広々とした農家の自宅とは比べようがありません。まず第一に空気の匂いが違います。福島の自宅では、朝になれば地平線に朝日が昇る、鶏の一番どりのコケコッコー、むせるような美しい緑の田圃や畦道に咲く小花、樹木に囲まれた山林、秋の紅葉、冬の星空のきらめき、どれひとつとっても田園風景は見事な自然の移ろいでした。東京は昼夜二十四時間コンビニが開いていて不自由がないとかパチンコ、映画館、デパートがある、交通が便利だとの声もありますが、それは大自然の素晴らしさを知らない人の申すことでしょう。一度でも土に根を下ろして生活を送れば自然の魅力に虜になるのは必定（ひつじょう）です。

私はここで孫世代の皆さんへ、自然の素晴らしさを売り込んでいるわけではありません。夢の電力といわれた原発が天変地異によって如何に脆く膨大な被害をもたらせたか、多くの犠牲を与えてしまったか、それを被害地以外の人々に充分理解してもらうために説明したのです。さらには私達に悲しいことが起こりました。家内は持病の腰痛が悪化して今は部屋の中から何処にも出られなくなったのです。車椅子生活になりました。外出するにもマンションはバリアフリーではありませんから。狭い一部屋で我慢しながら日々を送っている次第です。それに加えて実は私までが・・・癌の宣告を受けたのです。我が夫婦の病気を、地震、津波、原発事故の所為（せい）にしたくありませんが晩年を迎えた私にはただ、ただ、天の配分が恨めしい限りに思えました。

そこで、最初の手紙に立ち戻るのですが、お願いにはこうした根拠があったのです。先ほど申したとおり私は現在、前立腺癌に冒されています。検査をすると骨

への転移がありました。進行しています。一応、放射線治療はしていますがいずれ近いうちに・・・恐らく余命は一年もありますまい。七十七歳の喜寿を過ぎて百歳まで頑張るんだと家族に公言していましたが、それも適わぬものになりそうです。無論、あとの命を一年と決めたわけではありませんが、担当医の様子では間違いがないようなのです。そこで余命一年をどうして過ごそうかと考え始めたのです。

四十年以上前の話で恐縮ですが私どもは以前、家内ともども東京で中学校の教員生活を送っていました。私は先に申したとおり甲府市出身で大学は東京でした。卒業後郷里の甲府に帰らず渋谷区にある中学校で進学率を競うような私立校で教壇に立ちました。家内は福島県相馬郡飯舘村出身で杉並区立中学校の国語教員でした。たまたま授業研修などで言葉を交わすようになり結婚へと結びつき二人の子供に恵まれたのです。まあまあ太平な暮らしをしていたのですが教員生活に油が乗り始めた三十代の終わりごろ、飯舘村の家内の実家で義父が病で倒れたのです。家内の実家は三代続く（戦前は庄屋）農家でした。色々悩んだのですが家内が一人っ子であったため二人で農家を継ぐ決心をして村へ帰りました。始めは土との闘いに苦労もありましたが幸い義母がまだ達者だったものですから農業のイロハから教わりながらここまでやる事が出来ました。その義母も義父も既に今は泉下の人になってしまいましたが。

私は前立腺癌を宣告されて己の余命を知ることで毎日のように以後の生活を考えました。押し込められた一室の中で何をするべきか？どういうように死までの手順を過ごすか？家内が先に行くか、それとも自分の方か、いっそ故郷（ふるさと）の甲府へ帰ろうかとか、折に触れて埒（らち）もないことに思い巡らす毎日になったのです。ところが或る時、偶然テレビで東京浅草の洋食屋さんの女将の朗読を紹介している画像が目に飛び込んできました。見事な口演にすっかり魅了されたのです。一緒に見ていた家内が、お父さん、お父さんの書き溜めたもの、ああいう人に読んでもらったら良いのにね！と出し抜けに申すのです。実は大学時代から私は仲間が創る同人雑誌に参加していてエッセイや創作を秘かに続けていました。ひと頃は小説家になりたいという夢もなくはありませんでしたが農業に従事するようになってからはその夢も封印していたのです。ところが妙なもので娘夫婦に孫が出来てやれやれ安堵すると急に創作意欲が再発して、ここ十年ばかりは晴耕雨読ならぬ晴耕雨作で農作業が出来ない時はせっせと文章を書き綴っていました。と申してもアナログ人間、テレビや携帯電話は持ちますがパソコンやスマートフォンな

どはなく、もっぱら手書きの原稿用紙埋めです。書き溜めたものは数えてみると五十余、家内に背中を押されて挙げ句、じゃあ、どうすれば可能かということを探りました。そうこうする内、母校の放送部の皆さんに朗読して頂けたら嬉しい、こんな勝手な気持ちを選ぶことになったのです。自分の作品を朗読してもらう、若い誰かに読んでもらいながら死への旅立ちの準備としよう、そういう感情が強く湧き起こったのです。多分、こんな気持ちは若い皆さんへは失礼に当たるかも知れません。あるいはご理解できないかも知れません。虫の良い唐突な注文に聞こえるはずです。若い皆さんにとっては死は縁起でもない話でしょうから。

しかし、私の心情は、毎日、愛(いと)おしい自分の作品を床の中で聴きながら眠りに就きたい、意識が薄れていく中、朗読の妙に魅せられて永遠の眠りに就きたい、そんな意識がぐわーんと大きな望みとなって私の心を占めてきたのです。

もう、これでお判りでしょう、私は私の作品の朗読をお願いしたいという勝手をこの手紙を書きました。（六十年前の我々の時代にも放送部がありましたので）放送と朗読は違うと思います。ですが、この我が儘のお願いが適うかどうか、あくまで、これは私の勝手な欲望ですから様々な理由で副(そ)いかねるようであれば、どうぞ遠慮なくお断り下さって一向に構いません。

長々と細かな経緯を書き連ねてしまいました。余計なご心配やご負担を煩わして申し訳ありませんがどうぞ悪しからずご判断下さい。・・・　　草々

九月某日　　〇〇〇〇

皆はその手紙を食い入るように読んだ。そうして心が揺さぶられる何かが胸に萌して来るのを感じた。顧問のA先生も腕組みをして目を閉じていた。

私は同封された作品に素早く目を通す。いずれも原稿用紙五枚から十枚ほどの作品だった。懸念していた長いものや厭らしいものはなく内容は私小説風なもので文章も巧みのように思えた。先生が、この三っは文芸部の先生にも読んでもらおう、校長、副校長にも同様に読んでもらう、それで前向きのO、Kが出たら朗読プロジェクトを進めることにしようよ、と厳かな口調で言い放った。異議を挟む生徒は誰もいなかった。

一週間後、校長以下文芸部の顧問先生からも概(おおむ)ね好意的な返事を頂いた。やるからにはオジさんが感心して喜ぶ朗読を行なわなければならない、でくの坊のような稚拙な朗読ではいけないと思った。部員達の眼の色が変わる。ＩＣレコーダーに吹き込む作業の前に、三っの作品の朗読をみんなで分け合って読むことに

した。三人一組でチームを組む、一週間かけてそれぞれが一作品を朗読することにした。アナウンサー志望の男子部員も、いきなりの朗読に戸惑いは隠せないものの、それでも真剣に取り組んだ。感情を込めて、大袈裟にならず、強弱をつけて、朗読する。

そうこうしている内にオジさんから三通目の手紙が来た。それと同時に郵便為替で現金十万円が送られてきた。ＣＤ、ＩＣレコーダー用の費用及び諸々の経費と謝礼の気持を籠めました、となっている。私達は先生と相談して直ぐに送り返した。

私達放送部員は、学校の校長以下の許可の下（もと）でこれを受けたのであって勉強の一環でもあるから、お志（こころざし）はありがたいがＩＣレコーダーを買うぐらいのものであるから部費から調達できることで費用の一切はご心配無いよう、残りの作品全部を早急送って欲しい、ボランテァ活動として行ないたいのでご了承頂きたい、との返事を書く。

やがて興が乗って来た部員達が、もっとオジさんの作品を朗読したい、と言う声が囁かれ始めた。不思議なものである。始めはあれほど拒否反応があった朗読に今では全員がのめり込んでいる。三組のチームが競うように分散して作品の読み込みにに磨きを掛ける。エッセイあり戦争ものあり甲府を舞台にしたものありと多彩な朗読劇が展開する。

結果、オジさんの作品全部を遣り切ろういうプロジェクトが始まった。放課後に集合するとそれぞれが分担して読み合わせを行なう、一作品について一週間は費すのが原則、作品は長いものでも原稿用紙三十枚ほどであるから、それほど苦にはならなかった。

年を越すと三年生の私ともう一人のＫさんはセンター試験が控えている。下手をすれば試験に集中出来なくて一浪を覚悟しなければならない。家への負担が増すことが目に見えている。一年生や二年生だって二学期の中間テスト定期テストの成績が落ちるのは明らかだろう、Ａ先生は、その覚悟をもってやるべしとハッパを掛ける。私達は五十余の作品を貫徹するまでは作業に精出すことに決めている。三名に組んだそれぞれの三班は三台のＩＣレコーダーに吹き込んだ。そうして聴き直したりした。割と上手くいっている、それがみんなの感想だった。さらには終了した暁には機器を持参して全員（Ａ先生を含めて）が上京、オジさんをお見舞いをしようと決めていた。大先輩の笑顔が見たい、オジさんの喜ぶ顔が見

たい、でも、癌の病気は大丈夫だろうか、皆に不安が無いわけではなかった。オジさんの最初の手紙から既に四ヵ月が経過していたからである。

暮れの押し迫った師走、オジさんから、ホスピスであるケア病棟へ移ったという手紙が来た。弱弱しく少し乱れ気味の文字が綴られていた。ボクはもうダメかも知れないという弱気の文字が刻まれている。私の両親に由(よ)れば、癌の末期には痛みが伴い、そのためにモルヒネを使用して激痛を緩和させるのだそうである。文面の向こうにオジさんの苦闘が滲んでいるようであった。オジさんからの手紙に続いて奥さんからも丁寧なお礼の手紙が届く。車椅子の生活の奥さんはオジさんのホスピス入院を区切りにして郡山市に住む娘夫婦の方へ転居したという。差出は郡山市からになっている。本来なら主人と同伴して母校である御校をお尋ねして厚くお礼を申し上げなければいけないのに、返す返すも心残りであります、いずれ頃合いを見て代わりに娘夫婦が伺候して感謝を申し上げたいと申しております、と締め括られていた。

私は再度、奥様宛に手紙を送った。先輩が入院しているポスピス個人病棟へ立春の頃、完成したＩＣレコーダーを持参して吹き込んだ九名の全部員と指導して下さった顧問先生で参上する予定です、と。

オジさん・・・大先輩、お礼なんかご無用、それより、ほら、希望の朗読が私達、後輩によって叶えられたではありませんか、毎日毎日をご自分の作品を聴きながら眠りについて下さい、私達には、それしかお気持に沿うことが出来ないのが悲しいのです。ガンバレ！おじさん、ガンバレ、先輩！

三月になれば校長先生は定年退職でこの学校を去るらしい、副校長は転校し顧問のＡ先生も他所(よそ)の高校へ移って行く内示を受けているという。四月になれば一年生は二年生に、二年生は三年生に、そうして三年生の私たち二人は上京して山梨甲府を飛び立つ。こうして世の中は目まぐるしく過ぎて行くのだ。後輩たちは少ない期間で五月のＮコン予選の訓練に取り掛かっている。一時的に試験の出来が悪くてもそれは長い眼で見れば取り返しが幾らでもつく。苦労、格闘しながらオジさんの作品朗読を成し遂げた自信がみんなの中に植え付けられている。その方がよっぽど大切ではないか、そういう強い信念が頭を駆け巡っている。何時の日か、私も少し気取って大学のキャンパスを闊歩するに違いない、晴れ晴れした

笑顔を見せて。

オジさん、良かったね！人生は素晴らしいことがあるんだもの。ありがとう、いい勉強をさせてもらいました。感謝です。じゃあ、二月四日にお会いできることを楽しみに。・・・

一人で呟いていると思わず涙が目の奥に溢れて来た。どうして？・・・